

愛される理由

人口1万人のまちに3万人もの人が集まる

世代を越えて、地域を越えて

なぜ、こんなにも人々を魅了するのか

18年前、数多く開催されていた小さなイベントを一つにまとめて、盛大に開催してはどうか、という意見が発端で「でちこんか」は誕生しました。今でこそ3万人もの人が集まる祭典となりましたが、これまで、さまざまな苦労や困難を乗り越えてきました。

でちこんかが始まって以来、昨年まで実行委員長を務めていた毛利範男さんは「みんなの意見はまとまらず、相当の神経を使いました」と苦労を振り返ります。

当時はほとんどの看板が職員たちの徹夜による手作り。現在、申し込みが殺到するびつくり市も参加団体が少なく、出店を頼んで回った頃もありました。特設ステージでの催しは、小学生対象のクイズをしたり、一般対象のゲームをしたり、何をすれば人を楽し

ませられるのかと、試行錯誤の連続でした。

今、このでちこんかを支えるのは、▼一丸となって打ち合わせや準備を進め、イベントを成功させようと意気込むスタッフ▼この日のために必死に練習を重ね、腕に磨きをかけてきた邦楽団体▼地元特産品や手作り作品などを販売する、町内外から集まったびつくり市出店団体▼当日、ステージに華を添え、観客を魅了する各種団体▼毎年、祭典を楽しむに遠方からでも足を運ぶ客▼音響、照明や舞台設営などの、裏でイベントを支える業者の人。

参加の形や臨む思いは違っても「でちこんかを楽しむ」という目的はみんな同じです。その共通の目的を持ってこれまで続けてきました。

「楽しむため」の試行錯誤

は今もやむことはありません。びつくり市に出店した、鬼北町生活研究協議会の高田ミサ子会長は「今年は姫っこ地鶏の唐揚げをメニューに加えました。来場者をもてなしたいから」と新しいことに挑戦。参加者自らも工夫を重ねています。

でちこんかは、最新技術を使った催しがあるわけではありません。都会の有名なお店の料理が食べられるわけでもありません。ただ流行に手を出すのでは、一過性になり魅力もなく、継続はできなかつたでしょう。しかし、一人一人の向上心が「来年は何があるのだろう」「次はあのお店に行ってみよう」と、どの年齢層の人をも飽きさせない、人の楽しみたいという本能をくすぐる仕組みを作ってきたのです。

